Abstract

『満洲浪曼』における「白日の書」への一考察

林　濤
✉ lintao0412@aliyun.com

Yokota Fumiko's novel, *Hakujitsu No Sho*, was a candidate for the third Akutagawa Prize in the first half of 1936. Two years later in 1938, it was published in the opening issue of the Japanese literary and art magazine *Manchuria Romant*ic, which was influential during the Manchukuo period. However, in China this novel has not been adequately researched in academic circles. Centered on the relationship between *Hakujitsu No Sho* and *Manchuria Romant*ic, this paper explains the essence of the novel and the literary attitude of the author by analyzing the text in detail. Through this lesbian narrative, the social anxiety of the 1930s in Japan is symbolically represented and, at the same time, Yokota Fumiko hinted at her veiled rebellion against society and the times. Progressing from a young Leftist literary girl to a colleague of Japanese Romanticism after eight years in "Manchukuo", although it was hard for Yokota Fumiko to avoid following the trend, there is a clear difference between the "romance" in her works and the "grand romance" advocated by Kitamura Kennjirou, the editor of *Manchuria Romant*ic. The "romance" in her works has always maintained a certain distance from the center of literary world and embodied her rebellion against the times.

Keywords Hakujitsu No Sho(「白日の書」), Yokota Fumiko(横田文子), *Manchuria Romantic*(『満洲浪曼』), lesbian(同性愛), social anxiety(不安焦燥), romance(浪曼)

一

『満洲浪曼』は、「満洲」時代に新京(長春)を基盤とした日本語文芸誌である。1938年(康徳5)10月に第一輯を発刊し、1941年(康徳8)5月に第七輯までを刊行、1942年に『満洲浪曼叢書』として文庫本四冊が刊行されることを以て終焉する。雑誌の特色と言えば、文学だけでなく、映画、演劇、音楽など多ジャンルにわたる文章が掲載され、同人以外の優秀な作品も募集し、中国人の作品も積極的に翻訳し収録している点であろう。主宰者は当時「満映」に勤めていた北村謙次郎で、執筆陣には文学者、戯劇者、映画芸術家、評論家、新聞記者、編集者のほか、日本の官僚も、即ち当時の「満洲文化」を代表するであろう各方面の人物が集まっていた。同人誌であるが、総合文芸誌の色が濃い。また、その頃の「満洲」において、大連の『作文』以外に本格的な日本語文芸誌があまりなかったため、『満洲浪曼』が創刊されるとともに、「満洲」ないし日本国内文壇においても広く注目を集め、歓迎されたのである[1]。自明のことであるが、『満洲浪曼』は植民地時代の「満洲国」およびそこにいる各民族の深層心理を解明することに大変貴重な資料を提供してくれている。ここ十数年それに対する研究者の関心度が中日両国においても次第に高まり、2003年東京ゆまに書房より刊行された『満洲浪曼別巻「満洲浪曼」研究』は大きな成果であると言わなければならない。が、それは雑誌全体への把握であり、個々の作家や作品の考察にまだ足が踏み入れられていない。こうした研究現状の中、筆者はここでなかでも一層見落とされている女性作家の一人横田文子の小説「白日の書」を取り上げて、雑誌との関係からメスを入れ、具体的なテキスト分析を行っていきたい。

そもそも「白日の書」は『満洲浪曼』のために書き下ろしたものではなく、それまでに、神近市子主宰の『婦人文芸』第三巻第二号・四号・五号・六号(1936年2月~6月)に連載されていた。すでに掲載されたことのあるものを再び『満洲浪曼』創刊号に収録する意思決定自体から、自ずとこの作品を重んじる編集者の立場が伺えようが、この雑誌における「白日の書」の位置をより明瞭に示すために、創刊号の目次を以下の通り記しておく。

小　説

姉妹のこと …… 吉野治夫(5)
伝　　説 …… 長谷川濬(26)
一つの記録 …… 下島甚三(39)
浙江旅社 …… 福家富士夫(57)
同　行　者 …… 今村栄治(68)
鶴 …… 北村謙次郎(83)
白日の書 …… 横田文子(112)
アリヨーシャ …… 田兵作　大内隆雄訳(199)

詩

霧　　宿 …… 矢原禮三郎(204)

1　呂元明「『満洲浪曼』の全体像」(2003)を参照.(『満洲浪曼 別巻「満洲浪曼」研究』, 東京：ゆまに書房, 2003.1)pp.5-30.

なめくじの歌 …… 坂井艶司(206)
長　城　論 …… 長谷川四郎(208)
随　筆
雑　　草 …… 町原幸二(210)
六月の雪 …… 坪井與(218)
満洲文化について …… 諸家(223)
評　論
窓をひらけ …… 木崎龍(240)
農村を描け …… 牛島春子(252)
映画演技論 …… アイリス・バリイ　松本光庸訳(256)
満洲演劇の建設 …… 藤川研一(264)
跋 …… (273)

目次で示したように、『満洲浪曼』創刊号の最も大きな特色の一つと言えば、小説をたいへん重要視することである。すでに呂元明氏に指摘されているが、雑誌の巻頭に小説作品を置くことは実に「満洲文学」における大きな変化と言わなければならない。それより前に大連で出版された『満洲文学年誌』などの雑誌においては文学理念が巻頭に配されていた[2]。そして、小説を重要視する雑誌の編集意図は巻頭に配置されることの他に、小説欄203頁が全巻273頁の三分の二よりも多く占めているその分量のウェイトからも察せられる。その中で、本稿に取りあげる「白日の書」はなんと87頁で、小説欄の約二分の一も占める長いものである。さて、これほど重要な位置を占める「白日の書」とは一体どんな内容のものなのか、その内容が伝えようとするモチーフは何か、さらにそこに示している作者の文学姿勢はどんなものなのか。これらの問題をめぐって、以下詳細に考察を展開していく。

二

「白日の書」は「一部　死ぬ」「二部　生きる」「三部　殺す」の三部からなっている。そのあらすじを簡単に紹介しておくと、以下のようなものになる。

「一部　死ぬ」では、東京のある雑誌社に勤めている主人公私(木田)が、始終「何かえたいの知れぬ不安と焦燥」にさいなまれている。その不安と焦燥の源は、世間から異端視される自分の同性愛から来るようで、ちょうど二人の関係が「有頂天」になる頃、恋人延子は結婚の話を持ち込まれ、無理に京都の実家に連れ戻されたのである。どうしようもない「私」は酒に明け暮れ、自暴自棄的な生活をしはじめる。煩悶のドン底のなかで、「私」は自殺を図り、睡眠薬を飲んだ。しかし、死に損なった。そこで、「更生」がないと意識した「私」は「更生」に表徴されるものに復讐しようと決意する。「二部生きる」は、自殺行

2　注1に同じ。

為に失敗した「私」は、伊豆のT村の海岸で静養させられるが、自棄と復讐に悩まされる「私」の心象風景が、海岸の自然の風景に仮託して細密に描かれている。「三部殺す」は、故郷へ帰った「私」は、次第に高まってくるあらゆる「焦燥と不安」を解決するために、「復讐」の実行に移る。まずは町の酒場サボンで、××××教の男狂信者を「悪魔」と言って、その精神を殺そうとする。そして訪ねてきた恋人延子を殺してしまうのである。

明らかに、これは「同性愛」という題材を扱った小説である。しかし二人の女性の関係性に関しては、全編を通して実に抽象的、かつ簡潔にしか描かれていない。主人公はあくまでも「私」一人のようなものであり、延子と知り合い、そして同性愛関係になった経緯をすべて「私」の視点から語っている。

> 延子は、私の知人の、A大学に席ををく英語教授飯野氏の妹で、この春飯野氏宅をたづね上京して来た。自宅は京都にあつて、相当な実業家を親にもつてゐたが、私は友人の杉村季子と飯野氏の家へ遊びにゆくうち、延子ともだんだん口数を多くきくやうになり、親しくなつていつた。しかし、間もなく私はその親しみがもっと深いものになって、一種の恋愛に似た気持ちを延子に対して抱くやうになり、それと同時ごろ、延子もそんな気持を私に抱いてゐることを知つた。そして、あるちょつとした機会にお互ひの愛情をはつきり知ると、それから有頂天のかたちで、ずるずると足早く深いところへすべりこんでいつたのだつた[3]。

そして、延子は実家に連れ戻された後、「私」と延子の面会もわずか二回しか配置されていない。一回目は、「もう行けぬかも知れぬが、一度会いたいから来てくれ」という延子の手紙に応じて、「私」は京都へ会いに行ったのである。しかし具体的な面会の様子について、作者は一切筆を入れていない、もっぱら帰りの汽車で思い巡らす「私」の「不安と焦燥」を過剰なほどに描き出している。二回目は延子は東京で結婚することになるので、上京する途中、遠回りして故郷の町に「私」を訪ねてきたのであり、そしてそれが二人の永遠の別れになっている。この二回目の面会になってとうとうわれわれ読者は延子自らの声を聞くのである。が、それも愛の告白ではなく、ここまで彼女がようやく来られたいきさつの説明でしかない。依然として「私」の内心の葛藤がポイントで、きめ細かく描出されている。

> 私は一体どうしたのだらう、こんなに間がぬけるほど落ち着いてゐていゝのだらうか。私は自分で自分の心をつき刺し、ひきさいて延子のために苦しみ、弧(ママ)独の闇の世界で、自らを残虐極まる磔けにさらして身もだへしてゐたのではないか。延子への愛情を反響もなき虚空へ投げては、その悲しみのために涙して輾転ころげ伏してゐたではないか。それも、あゝ昨日まで、いや今日のいきさつまでかも知れぬ――延子の映像に向かつて大手をひろげて苦しんでゐたのではないか。

3 横田文子「白日の書」(『満洲浪曼』第1輯, 1936), p.114. テキストの引用はすべて旧字体を新字体に直し、旧仮名をそのまま保留したものである。

あゝ、いま私は延子を愛してゐるのだらうか、それとも憎悪してゐるのだらうか、それとも他人ごとのように無関心でゐるのだらうか。私にもそれはわからない。わたしは延子のいろいろの話を聞き、うなづきながら、心の奥ではそれを聞いてゐない風である[4]。

周知の通り、日本において女性同性愛が新聞や雑誌の記事、評論、文学作品などに言語表象として現われたのは、一九一〇年代だとされている。ことに1911年に新潟県の糸魚川で二人の女学生が心中したことが大きく報道されて以来、それが女性、ことに女学生同士の関係を指すようになったのである。もっとも「同性愛」という言葉が誕生するとともに、それを正常な異性愛に対立する異常な愛として位置づけられており、また「同性愛」の小説化も程度と意味の差こそあれ、そのテーマ、モティーフへの蔑視や貶めを免れ切ることはできなかった[5]。そのため、日本近代文学史上においては「同性愛」即ちレズビアリズムを小説化する作家は決して多いとは言えない。にもかかわらず、横田文子までの女性作家及びその作品を挙げれば、田村俊子の「あきらめ」(『大阪朝日新聞』1911.1.1~3.21)、吉屋信子の 「屋根裏の二処女」(洛陽堂, 1920)、宮本百合子の「一本の花」(『改造』1927.12)などが挙げられよう。これらの作品は、たいてい女性の社会における自立の問題と官能の目覚めの問題を抱え、程度の差があるけれども、いずれも二人の女性同士の関係性を官能とともに描き出しているところに共通性がある[6]。ところが、横田文子の「白日の書」は同じ同性愛の題材を扱いながらも、それらの作品との間に明らかに一線を画している。まず、主人公の「私」は既に雑誌会社に勤めている職業婦人であり、また「私」と延子との関係性に官能的な描写の介入も一切拒否されている点である。もし敢えて探し出せば、せいぜい次のような語り「私は仕事を惰け、二日も三日も下宿をあけ、飯野氏の宅へ泊りこんだ。人目も恥ずかしい格好だつた。しかし、私には恐れるもの一つなく、私は何もかにも甘へきつた暴君のふるまひだつた。」から、二人が親密な肉体関係を持っているだろうと推測できる。が、それは大変抽象的かつ曖昧な表現のみである。更に付け加えて言えば、この「白日の書」には、二人の官能どころか日常的な付き合いの様子さえも描かれていないと言っていいほどである。ここまで辿ってみると、同性愛の題材を扱っているから「白日の書」をたんに同性愛の小説として読むのは不十分で、より象徴的に何かを表出しようとするところにこの作品の意味があると筆者は主張したい。

繰り返すことになるが、実は「白日の書」全編を貫いているものは、ほかでもなく「私」の「不安と焦燥」ないし「絶望と復讐」の情緒である。小説第一部の冒頭から、すでに「――なんだといふだらう、どうしたといふだらう。これでいゝのかしら、なに、何か不

4 横田文子「白日の書」(『満洲浪曼』第1輯, 1936), pp.191-192.

5 大森郁之助「要略・日本近代小説の《貝合せ》――その傾向、あるいは偏向――」を参照.(『札幌大学総合論叢』第5号, 1998), pp.128-115.

6 菅聡子「女性同士の絆―近代日本の女性同性愛―」(『国文』第106号, 2006), pp.24-39を参照.

足だとでもいふのか、いや何でか、なにかやりきれぬ気持がはじまりさうなのだ。」と、「えたいの知れぬ不安と焦燥が、のろのろと頭のなかを駆けまはつてゐる」。この情緒が延々と続き、「死ぬ」という極致の自虐行為にまで「私」を導く。第二部において、伊豆の海岸で静養させられる「私」は、「いったん落ちつきをみせた気持はまたも何か騒ぎはじめ、私は正体をはっきりさせないくせに、行列のやうにすぢ立ち、ひしめき立ってやって来る、ある感情を不安げに眺めなければならなかった。」と海岸の静かな風景に囲まれながらも、依然として「不安」の情緒が胸裏を撹乱する。第三部においては、その「不安と焦燥」の原因を主人公の「私」はそれまでの生活を振り返り、自分なりに次のように分析している。長いが引用しておく。

> 思へば、私は節度しらぬ性格破綻者として似合しい恋愛をし、その節度しらぬために破滅の苦しみにあひ、そして似合はしくそれを失つた。また、背を向けながら、無理やり仕方なしにぶらさがつてゐた市民社会の「生活の綱」からもんどりうつて転落し、本来の自分の姿である「余計者」にかへつた。現実のかなしさ、恋愛のはかなさをはつきり思ひ知り、自分のゐるべき場所を見失つたこの「余計者」は何をしたらう。私は「死」を試ろみ他のいきさつを拒絶した。しかし、その「死を体験する試み」も失敗し、ことごとくのものを失ひ、ただ一つ虚空によろめひてゐた私の肉体のみほろびなかつたのだ。私の肉体は復活した。そして「静養」といふ有難いことばにすがつて、私は漂々伊豆の海岸へ遁走し、そこで喪失したあらゆる幽霊どもに悩まされ傷つけられつゝ幾日かを送った。さうして私が新しく企らみ、新しく試みようと決意したことは、私を傷つけた一切のものに対する「復讐」だつた[7]。

以上の引用文から読み取れる「不安と焦燥」という敗北感の原因は主に世間(主人公自身も含めて)に認められない「同性愛」と居場所を見失った「余計者」であるという「私」の認識にあると言えよう。前者に関して、東栄蔵は「白日の書」をはじめとする横田文学に描きこめられている女性の同性愛に関して次のような指摘をしている。

> かかる同性愛は当時の秩序と道徳からは変態・変質者として異端視され蔑視されていた。横田文子はそれを生の証として切なく美しく描くことにより、女性が家制度によって差別され、男女の恋愛さえ不倫視されていた社会を撃ち、反逆の表徴としたのであった[8]。

指摘はもっともであるが、「白日の書」のテキストに即して考察すれば、これほど「私」を追いつめた理由として、異端視される同性愛だけを挙げるのは不十分であろう。「私」は経済的に決して豊かとは言えないが、一応収入のある職業婦人であり、そして何より東京で一人暮らしをしている自由な身分である。延子との同性愛関係を知った友人の季

7 横田文子「白日の書」(『満洲浪曼』第1輯, 1936), p.168.
8 東栄蔵『横田文子 人と作品』(長野：信濃毎日新聞社, 1993), p.385.

子らも十分理解してくれている。唯一の妨げは延子の京都にある「厳格な家」と東京にいる教授の兄貴夫婦である。しかし、「私」への警戒は、文章中において「京都の家からは、結婚の話もあって、延子にすぐ帰るようにとさかんに手紙が来て、私とのことを心配していた飯野氏夫妻は強制的にも延子に帰るようにすすめた」とわずか一、二行程度でしか表現されていないし、周りの社会からの差別の視線もまったく描出されていない。後者の「余計者」に関しては、更に唐突な表現であるとしか思えない。そこで、真の「不安と焦燥」の原因を単にテキストに求めるのは無理であるようなので、作家文子の実生活体験と「白日の書」が誕生するその時代背景とを結び合わせたうえでそれを追究していきたい。

三

横田文子は1931年に全日本無産者芸術連盟(ナップ)に加入し、その前後、二年近く組織活動をしている。と同時に、この頃小林多喜二や葉山嘉樹などの作品を愛読し、文子を代表するプロレタリア文学作品「腕」(1930年『文芸車』創刊号)や「導火線」(1931年9月『女人芸術』4巻9号)及び最初の作品集『一年間の手紙』(1931年、生活感情社)などを世に送っている。いかにも生命力にあふれ、文学にも実りが多い文子の輝く青春時代に見えるが、「反逆—失意、失敗、失敗から反逆反逆—これが私の過去の大半だ」と文子は『一年間の手紙』の自序の冒頭でその頃の自分の精神状況を述べている。

1931年9月『女人芸術』4巻9号に発表された「導火線」は九つの場面で構成されている短編小説で、昭和初期の農村恐慌を背景に、村の大地主大沢一家とそれを取り巻く権力者たちの搾取と圧迫に対する小作人、教員、製糸工場の女工などを含めるプロレタリアの反抗を描いている。結局ビラをまくことで多くのメンバーが警察に捕らえられたが、「赤い火をつけられた導火線はそのままぐんぐん燃えて行った」と希望に満ちた言葉で小説が結ばれている。「荒削りではあるが迫力あるリアリズムの手法で描かれてい」[9]て、プロレタリアの群像を描き出した小林多喜二の「蟹工船」さえ思い出させる作品である。ところで、中野重治はこの作品が発表された翌十月号の「女人芸術」の文芸時評で「作者が農村の階級分析をハッキリやっていない」[10]と批判している。中野のこの批判の矛先は作中の定一という人物の造形にあろうと推測できる。定一は体制側の青年訓練所の一軍人であるが、ビラを見て、「資本家の利益のため、ひらかれたあの×戦争——そして引っ張り出されて同じ人間にぶっ×された父」[11]を思い、自分の留守に蚕飼いに苦労している母や妹のことを考え、「青訓」から脱退し、小作人たちの無産階級団体闘争に立ち上がったのである。中野の批評は明確な階級意識を以て先進的な人物の先進的な行動を描

9 東栄蔵『横田文子 人と作品』(長野：信濃毎日新聞社，1993)，p.380.
10 注9に同じ。
11 東栄蔵『横田文子 人と作品』(長野：信濃毎日新聞社，1993)，p.23.

くことを主張するプロレタリア・リアリズムが高唱されるプロレタリア文学高揚期のなかで言及されたもので、今日の文学視点から見てみれば、必ずしも妥当とは言えない。むしろ当時の横田文子は中央文壇から一歩離れたところで、彼らが見落としているプロレタリア運動の一側面をより透徹に見ており、体制側の人間の寝返りを描くことを通して、彼女独自の文学特色をなしていると思われる。付言しておくが、小説「腕」も同じ体制側の「下っ端刑事」がのちに労働運動に飛びこんでいくその「転向」を描いたものである。以上のような中野の批評が、一地方の小さな町でプロレタリア運動と文学に全身を投げていた若い文子にとっていかに大きな打撃だったか想像に難くない。1932年秋の家出や「白日の書」に綿々と描かれている「不安と焦燥」が、一方で、東栄蔵の指摘の如く「家制度と良妻賢母の道徳が呪縛していた昭和初期に、地方の小さな町で若い女性がこのようなエネルギッシュな文学活動をすることは、「家」に背くことであり、周囲からさまざまに異端視されることだった」ことに由来し、他方では、文子のこのようなプロレタリア運動経験と人生や文学の挫折とも無関係ではないと筆者は思う。こうした認識に基づいて考えれば、第一部における以下のような描写はそのような心情の典型的な現われであろう。

> 私の性格のみごとな破産は、私のあらゆるものに対する自信をうばひ、相手の腹をのぞきこんでおかないと身動きも出来ないほどだつた。そして相手の顔色一つで、私は悲哀に転落したり、歓喜に跳躍したりする。私は、人をいくらでも愛することが出来たが、自分に対してはあらゆる虐殺を強ひて平気だつた。私は、このやうに、自分の喪失を恐れながら自分を平気で虐殺してゆく、矛盾だらけの気持のなかをつねに彷徨してゐたのだつた[12]。

また、「白日の書」が最初に雑誌掲載されたのは『婦人文芸』で、時期は1936年2月から6月にかけてのことである。そこからまず小説の執筆時間は1935年前後にほぼ断定できる。そして、テキスト中の「私は申しぶんなしの親不孝をして来た。親がわるい、家庭がわるいと自分できめつけ、自棄の格好を身につけて、酒をのんだ。文学をやり、左翼の運動にもはいつた」という主人公「木田さん」の悔いの言葉を、さらに文子の左翼運動経験と結び合わせて考えれば、作品の内部時間は1933、4年頃に当たると推定できる。周知の通り、「九・一八事変」(1918年)を契機に、日本は戦争に急速に向かって行くとともに、プロレタリア文学も厳しく統制、圧迫されはじめた。1932年の3月から6月にかけ、日本プロレタリア文化連盟(コップ)の指導的メンバー中野重治、窪川鶴次郎、蔵原惟人など約四百人が検挙、逮捕され、プロレタリア運動は壊滅的な打撃を受けている。1933年2月に小林多喜二が築地署で虐殺され、同年6月獄中にあった日本共産党の最高指導者佐野学・鍋山貞親は「共同被告同士に告ぐる書」という転向声明を発表、この二つのことが日本共産党の内外に大きな衝撃を与えた。そこで作家同盟内部にも動揺と混乱が

12 横田文子「白日の書」(『満洲浪曼』第1輯, 1936), p.118.

生じ、脱退者が続出し、プロレタリア文化連盟(コップ)が1934年2月に自動的に解体された。興味深いことに、「白日の書」は丁度日本のプロレタリア運動、プロレタリア文学運動からの転向者が続出し、そしてその己の転向を何らかの素材としたいわゆる転向文学が続々と発表されたこの時期を背景に創出されたものである。

横田文子はプロレタリア運動に参加し、プロレタリア文学作品も発表したが、運動にしても文壇にしてもつねに周辺にいる「余計者」であるためか、検挙も逮捕もされなかった。そのため、転向の声明も別に発表する必要はなかった。しかし、東京に出て「日本浪曼派」の人々との交わりのなかで、おのずからプロレタリア運動と文学から疎遠になってゆく横田文子の内心では、ある種の敗北感や罪悪感を持たないわけにはいかなかったであろう。かつて情熱を捧げたものを裏切ることは即ち自己自身を裏切ることであり、検挙された人々との思いに程度の差こそあれ、人間に懐疑と不安と絶望の情緒をもたらすに違いない。「白日の書」を貫いている「不安と焦燥」の描出はテキストにおいて語られている「同性愛」の他に、作家横田文子がプロレタリア運動・文学に携わる前後の余計者・懐疑者としての思いと、無関係ではないものと思われる。

「不安と焦燥」の他に、「白日の書」においては、「復讐」についてもまた作者が筆を惜しまずに描き出すところである。失敗に失敗を重ね、「不安と焦燥」に駆られている「私」は絶望する。「私を傷つけた一切のものに対する「復讐」」はそこから脱出をもとめる出口となった。しかし、その「一切のもの」とは何か、そしてどのようにして復讐するのか、最初は必ずしも明瞭ではない。「文字通り迷へる羊」。そこで、偶然にも伊豆の街をぶらついていた時の「私」は、古ぼけた一つの活動写真館をみとめて、そこに並べてある写真を眺めた。

> 写真の多くは勇ましい殺人の場面で、刀をふりかぶつて形よく身がまへた武士が、多くの相手を眼の前にしてふんぞりかへてゐる。
>
> 私は、こいつはいゝものにぶつかつたな、と思つた。主役が、えいつと見得をきつて、やつと打ち下ろす刀の下で、相手がうーんとのけぞる。これも形のいゝ斬られ方——。それも一人や二人を殺すのではない、何十人と殺されてゆくのだ。私は躊躇なくキツプを買つた[13]。

写真だけではなく、写真館に入って見た時代物「近藤勇」もまた勇ましい殺人の場面であった。

> 近藤勇は、ぢりぢり寄せて来る相手を、かつと開いた眼でねめつけながら、静かに羽織の紐をとくのだ。とたんに、近くの一人が斬りかゝる、はつと思ふまもなく、勇みの大刀一閃して、その相手は虚空をつかんでのけぞる。勇は大刀をずつと前へつき出して、何とかの構へをつくるのだ。それからは、えいツばつさり、やツばつさりで、何人もが忽ち横に、後ろに、斬り倒されてゆくのである[14]。

13 横田文子「白日の書」(『満洲浪曼』第1輯, 1936), p.159.

そこから触発されて、「ふつと私は、さつき見た殺人の場面を思ひだした。「人殺し」は何か魅力をもつてゐた。」「――若し延子を殺すとしたなら」と考えはじめ、内心の苦闘は激しかったものの、とうとう延子を殺すに至り、「復讐」を成し遂げた。もう一つ「私」の「復讐」は町の酒場サボンで会った、××××教の男狂信者に対するものである。男の論理に従うと、たとえ地球が滅びるとしても、神の子は助かり、悪魔は地の底へもぐって永久に出て来られない。そこで、会った当初から嫌悪感を抱いているこの男に「私は」「悪魔め」と言ってその精神を殺そうと復讐を図った。以上二つの「復讐」をめぐる描写はほぼ第三部によって完成されている。ここにおいて、第三部の小見出し「殺す」が実に「復讐」のキーワードとなっている。「復讐」の一つは実際に包丁を用いて延子を殺すことによって完成されており、しかもそれが写真館内外で見た殺人の写真と場面に触発されたものである。もう一つの「復讐」は「私」の口から出る言葉にしか見えないが、復讐される男は、明らかに殺すことを自己の使命とする××××教狂信者の戦争擁護者である。男は「信念に張りきった」態度で、次のような言葉を「私」に吐露している。

> あなたは、聖書のなかにある、キリストのこの言葉を知つてゐるでせうか、やがて東洋のある国が全世界を統一する、といふ言葉を――。この神の子のおつしゃる(東洋ある国)といふのは我が国のことなのです。やがて我が国は全世界を征服し統一するでせう。これも神のお告げです。われへはそれを信じてやみません。われへはそのことのために身を賭して戦ふ覚悟でゐます。
>
> (中略)
>
> 私はその東洋のある国、即ち我が国のために剣をとるのを光栄と思つてゐるのですが――[15]

昭和十年代後半の日本近代史を振り返ってみれば、殺戮の光景がしばしば見られたのである。前に指摘した小林多喜二が虐殺されたのはもちろんのこと、1932年2月以来の井上準之助、団琢磨暗殺事件、「満洲国」の成立、「五・一五事件」、「神兵隊事件」及び翌年8月の国際連盟脱退、1936年「二・二六事件」など一連の血腥い事件が、軍部を中心とする日本ファシストたちによって行われた。「白日の書」に描かれた「不安と焦燥」は実はこうした社会の不安と動揺にも由来しているし、「同性愛」に表象された「復讐」もこうしたファシズムが横行する時代へのアイロニカルな反逆として読み取れよう。ただし、これらの「復讐」は必ずしも成功したとは言えない。男に対して復讐できたことはあくまでも「私」の思い込みで、しかも一時の喜びでしかない。「神の子を悪魔にかへた瀆罪の結果は、何かによって私の頭上をおそひはしないかと、こゝでも不安だった」のである。そして、延子を殺した後の「私」の心象風景も相変わらず不安が続いている。それが幻想に託して描出されている。その時、神の奇蹟――第二のノアの洪水が起こり、延子

14 注13に同じ。

15 横田文子「白日の書」(『満洲浪曼』第1輯, 1936), p.173.

は巨大な船に助けられる。しかし、「救いの声」を拒否した「私」は「荒れ狂ふ波濤のなかで、悲しみに打ちひしがれつゝ、限りなきよろめきをつづけるのだった。」ここまで辿ってきて、「白日の書」のモチーフを概括して言えば、即ち昭和十年代後半の殺伐とした時代雰囲気のなかでの人々の不安と焦燥及びその時代への屈折した反逆を、一人の女性の同性愛物語を通して象徴的に表出したのである。

ところで、なぜこうした時代の不安と焦燥及びそれへの反逆を他でもなく「同性愛」として表象したのだろうか。実のところ、これは別に作家横田文子による一時的な思いつきではなく、まさに時代そのものが提供する良き素材なのである。松葉志穂の考察によると、1912年1月1日から1945年8月15日までの同性同士の心中事件は既遂未遂を合わせて189件確認できるが、男性同士が65件であるのに対して、女性同士は124件となっている。そのうち同性愛関係にある者同士と明記されているものは48件であり、多くは1920年代後半から30年代に集中している。しかも圧倒的多数は「職業婦人」に該当する層である[16]。そもそも、同性愛は結婚や生殖を拒否することを意味し、それが「発見」されるとともに、次世代の国民を産み・育てる明治日本の良妻賢母規範からの逸脱者として異端視された。昭和十年代に入ると、日本が加速的に戦争に傾き、人口増加がより切実な問題として国から重んじられていく。こうした時代背景の下で、女子とくに職業婦人の同性愛がより危険なものとして日本の社会から忌避された。というのは、松葉氏が指摘するように、彼女らの愛が「女学生のそれのように思春期の＜夢＞や＜憧憬＞では済まされない現実的な問題として、すなわち＜生活の実践＞に結びついた」[17]のであるからである。そこで、話題を提供するために『読売新聞』、『婦人公論』といった著名な新聞・雑誌が女性の自殺や女性同士の心中をめぐって大いに報道した。もっとも、その真のねらいは松葉氏の言葉を借りて言えば、即ち「体制側の言説が女性同性愛の欲望を抹殺するための見せしめとして衆目に掲げた＜生け贄＞だった」[18]のである。しかし、裏返して読めば、これも女性たちによる自らの「死」を以っての体制側への反逆であり、「自由」や「権利」といった近代的理念に基づく自己肯定的な生き方の主張でもある。「白日の書」に描かれている主人公「私」はまさに昭和初期のこれらの職業婦人の一人と言えよう。かつて「日本浪曼派」の主宰者だった保田與重郎が、「白日の書」に関する同時代批評で、「この作品に描かれたものは、激しいけふの日の精神の罠の構造の摘発である。あるひは今日の切実の思想と心理を、さながらの企ての中央でたどられてゐる」[19]と述べたのは、その傍証となっている。しかしながら、女性の同性愛は必ずしも「白日の書」に描かれようとする中心内容ではない。それを素材に使って、自らの体制側への反逆的な文学姿勢を示そうとするところこそ作家横田文子の真の追求ではないかと筆者はここで

16 松葉志穂「近代日本における職業婦人同士の心中と同性愛―1920~30年代を中心に―」(『大阪大学日本学報』第31号，2012)，pp.114-115.

17 注16に同じ，p.125.

18 注16に同じ，p.126.

19 保田與重郎「跋」(横田文子『白日の書』赤塚書房，1939.6)，pp.169-170.

主張したい。第三回芥川賞の有力候補となっている「白日の書」の落選後まもなく、『文芸通信』1936年10月号に寄せた文子の次のような手記がいみじくもそれを証しているであろう。

> 今を知る病人は、落日のははかなさや薄暮れの哀愁、夜の暗黒の悲しみを知っている。そしてそれを強いられた怒りを知っているのだ。それを直かに知らなくては暁の光りをのぞむことも出来はしない。病患の苦痛こそ健康への祈念である。そうした暁を知るため私はデカダンスの文学を書こうと決意した。今日の悲しい事情のなかに生き、デカダンスの文学を書くことは、私にとって復讐の文学すると同義語である。現代に復讐する決意して現代を描こうと思う。
>
> しかし間違って貰いたくないのは、世俗の頽廃をそのまま描くことにあるのではない。世俗をそのまま写すのなら世俗の方が本物である。当世、進歩的人情美談、物欲の権化的人間の発明が流行っているらしいが、私はその世俗を描く作者の卑俗性を排撃するものである。文学は教室の講義でもなければ、人間のへどのはき処でもない筈と思う。私にとってはあらゆる現実の浪曼化にある。新しい世紀をつくる夢の実現である。内的現実の記録であり、そこまで追いつめられた心情の告白である。

四

以上、作家横田文子の左翼運動・文学への参加や、昭和初期の時代背景と結びつけながら、小説「白日の書」のモチーフを分析してきた。なぜ『満洲浪曼』創刊号にこの長い小説が掲げられたのか、その理由の一つに小説のモチーフが大きく関わっているのではないかと思う。

『満洲浪曼』が創刊された当初、雑誌の編集方針について、第一輯の創刊辞に当たる「跋」は次のように記している。

> われわれの仕事が、現在すぐ何かの役に立つだらうといふやうなことは、あまり考へたくない。文学の仕事といふものは、純粋であればあるだけ、ものゝ役に立つことすくないものである。
>
> われわれの意図するところを、このやうな書物の形にして外に出すということすら、われわれ本来の思考の中核を為すものではない。われわれの実体は、もつと茫漠として捕捉しがたい。絢爛たる思想、火のごとき情熱、幽かにしてやさしき情緒は、惟ふにわれら個々人の内部において更に豊かであらう。われらはいま、いかに生きることにより、内部の豊かさのいや増すかを考へ、そして豊かさの自らなる氾濫の日の来るべきを信ずることに、最も大いなる悦びを知りたいと念願する。
>
> 詞華集満洲浪曼は、惟一つの試みであるに過ぎない。われらは布教の徒ではない故に、文字を弄してさへわが仏尊しと説く低俗には与したくない[20]。

上記「跋」に力説されているものは主に二点に帰結できる。一つは個性や内なる思想、情熱を重視すべきである、というような日本浪曼派の精神の称揚であり、もう一つは「われわれの仕事が、現在すぐ何かの役に立つだらうといふやうなことは、あまり考へたくない」、「われらは布教の徒ではない」というような雑誌編集上の立場の堅持である。ここに、文学の純粋さを主張することなどによって、国策文学を唱える日本政府との距離を取って見せようとする主宰者北村謙次郎の文学姿勢の一面が伺えよう。

また、当時「満洲国」の首都新京(『満洲浪曼』の発刊地)が北村謙次郎に与えた印象というと、彼の回想録『北辺慕情記』に次のような一節が綴られている。

> その頃の満洲国官吏というと、よく飲みよく遊びもしたようだが、協和服を着込んで建国精神や協和理念を説くあたり、颯爽たる気概にむしろ筆者などアテられ気味で、渡満当初はひどく当惑したことを思い出す。新京だけならまだしも、彼らは日本に出かけようが大連あたりへ出張しようが、臆面もなくこの「満州風」を吹きまくつたから、ずいぶんヘキエキする向きが少なくなかつた筈だ。そこでこの「風」を新京イデオロギーと尊称し、満鉄マンあたりによつて代表される自由主義的な大連イデオロギーなるものが、はつきりこれと対立することとなつた。もともと関東州や満鉄附属地に住み、長年に亘りこつこつ一家をなしたという連中は大正時代の思潮を背景とすると同時に、自由港大連の影響もあつて、考え方が小市民的、自由主義的なのは当然である。これを大きく支えるのが、満鉄という大温室であつた[21]。

北村謙次郎は満鉄マンのムードと新京イデオロギーをここで実に面白く対照的に語っていて、後者に対する不満を隠すことなく表している。尾崎秀雄はそれを『満洲浪曼』と結びつけて考え、「雑誌(『満洲浪曼』筆者注)の創刊がこのような新京イデオロギーに対する軽い反逆を意味していた」[22]と指摘している。この指摘には筆者も賛同を示したい。但し、その「軽い反逆」が具体的に実現できたのは、強い反逆精神の称揚をモチーフにする「白日の書」のような小説の掲載があったためであると思う。女性の同性愛物語に象徴された時代の不安と焦燥および主人公の復讐にこめられた体制側への反逆の情熱を抒情豊かに描き出した「白日の書」は、個性や内なる思想、情熱といった日本浪曼主義の精神を重視し、自由な文学空間を保ち、政府との距離をとろうとする『満洲浪曼』創刊時の北村の文学主張にうまくマッチしているからであろう。もっとも、文子と主宰者の北村謙次郎とは、かつての「日本浪曼派」の同人であったことや、当時渡満した女性作家はもとより少なかったことや、「白日の書」が芥川賞の有力候補作品だったことなども、「白日の書」を『満洲浪漫』創刊号に再録した理由として考えられないこともない。

ところで、興味深いことに、「白日の書」が再録されて五ヵ月後、主宰者の北村は『満洲浪曼』第二輯に載せたエッセイ「時評的「詩と真実」」において、この小説について次の

20 北村謙次郎など「跋」(『満洲浪曼』第1輯, 1938), p.274.
21 北村謙次郎『北辺慕情記』(東京：大学書房, 1960), pp.51-52.
22 尾崎秀雄『近代文学の傷痕』(東京：岩波書店, 1991), p.228.

ような批判の意見を出している。

> 満洲浪曼は、決して厳正な写実文学を却けるものではないことははつきり認めて貰へると思ふが、瑣末な日茶飯事文学や低俗平板な自然主義的行きかたの薄汚なさを却けることだけは、依然として変かたらない筈であることも、はつきり認めておいて貰はねばならぬ。安易な行き方を、絶対に却けたいのである。
>
> 日常瑣末主義といふのではもちろんないが、横田文子氏の「白日の書」なども、今から見返してみると、かなり安易な行きかたであることに気づく。彼女は豊かな構成力を恵まれてゐるにも拘はらず、この一篇ではひたすら自己を追ふことにのみ急で、豊かな構成といふものには逃げを打ち、大きなロマン文学を生み出すことに失敗した。
>
> （中略）
>
> 虚妄の美は、あひかはらず僕の胸奥から去つてゐない。それにも拘はらず、そのためにのみ、無理な背伸びをしたくない[23]。

上記の文脈から見てみると、「白日の書」についての北村の不満は次の二つにまとめられよう。一つは「安易な行き方」、即ち「低俗平板な自然主義的」な書き方についての不満であり、もう一つは「大きなロマン文学」を生み出さなかった内容構成の小ささについての不満である。しかし、前者に関しては、「白日の書」は第一人称で書かれ、作者個人の反逆精神が投影しているにもかかわらず、けっして「私小説」とは言えない。それは「同性愛」をあくまでも抽象的に描いていることにも由来しているし、主人公の精神上の不安・焦燥・絶望・復讐といったものの描出が、自分と自分との対話や夢、さらには幻想というような手法によって実現されていることにも由来しているからである。後者に関しては、一般論として、自我の確執は日本近代文学の中心的課題であるとも言えるし、創刊号の「跋」に「絢爛たる思想、火のごとき情熱、幽かにしてやさしき情緒は、惟ふにわれら個々人の内部において更に豊かであらう」と北村自身も個人の内なる思想の豊かさをはっきりと主張している。そこで、「白日の書」を批判する根拠としての「大きなロマン」とは、いったいどんな内実のものなのか、と疑問を抱かざるをえない。上記のエッセイにおいて、北村は「大きなロマンの構成は、僕らがこんどこの刊行物を出すにいたった大きな動機の一つ」であるとか、「写実文学、実態の美に則する文学」が「壮大なロマン」を構成する「基礎」であるとか、あるときは「大きなロマン」、あるときは「壮大なロマン」という言葉を頻繁に使用しているが、それを明確に説明していない。但しここから、芸術面における北村なりの変化、即ち「日本浪曼派」の信仰めいた観念的なものから次第に写実文学に対する賛美に傾いたとみられることがわかる。そして、1940年の時点になると、北村はさらに「満洲ロマン」を大陸に根ざす写実文学だという明瞭な認識に発展していくのである。

---

23 北村謙次郎「時評的＜詩と真実＞」(『満洲浪曼』第2輯，1938)，p.169.

満洲ロマンの内包する精神は、派として日本浪曼派を受け継ぐものでなく、いはばその氾濫であり実践でもあるわけだが、僕らは先づ沈黙の美徳の中に出発した。囀つたところで何にならう。僕らはひそかに、永遠の価値についての探求と、大陸性への接近、溶解といふ容易ならぬ作業の開始をもくろんでいた。たとへば古代日本人の明朗と闊達は、大陸の風貌の前に一旦は死ななければならなゐのである。

（中略）

われわれが今日、すでに黄塵を膚肉のものとして語らうとするとき、それはわれわれ自身の大陸性の獲得と見るより、一方的にのみ生きてゐたロマンの観念の発展とみた方が当たつてゐるかもしれない。それにも拘はらず、僕らは更に多くの「死」を予想しない限り、真の意味の、大陸性の獲得、ロマンの完成を期し難いであらう。たとへば僕らは、芸術上の無駄の意味を知らない。知つてはゐても、極端なほどにそれを恐れる。無駄な積み重ねといふものが、われわれの性に合はないからである。しかも大陸ロマンとは、野方図もない無駄の累積なのだ[24]。

「探求と観照」というこの文章において、北村は何度も「死」という言葉を挙げて、もし日本人が「満洲」で作家になるとしたら、一旦日本を捨てて、まず「満洲」の生活環境に溶け込み、「満洲」の現状、「満人作家の作品の暗さ」まで「容認しなければならない」、そうしてはじめて新しく生まれ変わることができるのであると主張している。呂元明氏の提示した北村謙次郎のこの「ロマン」に関する説は、「彼が「満洲」で暮らし、創作の甘苦を舐めた「無駄」な経験の累積によるものであり、中国東北部での暮らしや中国の状況をよく理解していたからこそ、このような芸術に対する意見を述べることができたのである」[25]と、きわめて優れた認識論として称えている。しかし、呂氏の指摘は単なる北村の芸術認識論についてのものである。実は同じ文章において、日本の新聞雑誌を賑わせている政治性と芸術性の問題」をめぐる議論について、北村は次のような発言もしている。

国策だからといふので協和を口にし、建国精神に則るといふので建国文学が名乗り出るのではない。中心に在るものは僕らの芸術家としての魂であり、美意識の純化といふ渇仰のみである。誰が国策の尊貴を知り、建国イデエの深さを知るものぞと問へば芸術家以外にその人なしと答へたいのが僕の心情である[26]。

ここに見られる、「国策の尊貴を知り、建国イデエの深さを知るものぞと問へば芸術家以外にその人なし」云々という言葉は、明らかに芸術家としての北村の思想上の認識を現わしている。彼は「日本浪曼派」の主張と異なる、大地に根ざす写実文学という「満洲文学」の独自性を主張しているように見えるが、それが必ずしも「満洲国」の独立には

24 北村謙次郎「探求と観照」(『満洲浪曼』第5輯，1940)，pp. 73-74.
25 呂元明「満洲浪曼 の全体像」(『満洲浪曼』別巻「満洲浪曼」研究，東京：ゆまに書房，2003.1).
26 北村謙次郎「探求と観照」(『満洲浪曼』第5輯，1940).

つながっていない。建国の神話づくりを基本的な理念に据えているという思想の深層面においては、まさに劉建輝氏が指摘するように、大陸という「混沌の母胎」から自分の「理想主義」を抽出しようとした保田與重郎との間には、一定の距離があるかもしれないが、両者のロマンチシズムは大いに響きかわしあっている[27]。『満洲浪曼』における横田文子の「白日の書」に対する北村の態度の変化も、彼の思想上の「満洲ロマン」についての認識の変化を傍証するものであろう。

そもそも、『満洲浪曼』はその誕生から複雑な様相を呈していた。まず、執筆陣の構成が複雑で、積極的に国策を擁護した主張もあるし、国策に抵抗しようとする主張もある。そのうえ、「満洲文学」の独自性を強く主張して、日本国内文壇との主導権を争う人もいる。また、雑誌の出資を見てみれば、政府的な色彩が極めて強い組織である「満日文化協会」からの金銭面の援助があったと推測されている。同協会から金銭的援助を受けた以上、国策鼓吹の義務を課せられたことや言論的制約を受けたことなどは自然な成り行きであろう。こうした雑誌編集と運営の背景の下で、主宰者としての北村謙次郎は「美意識の純化」を主張していたのにもかかわらず、完全にそこから抜け出すことができなかったことも想像に難くない。

五

女性同性愛という題材を通して、象徴的に描かれた時代の不安・焦燥、そして絶望したあげくの出口としての復讐及びそこに秘められた体制側への反逆精神などを総括して、「白日の書」に表出された横田文子なりの「浪曼」があったと筆者は称したい。そしてここに結晶した「浪曼」は、それまでの彼女の実生活体験や時代雰囲気と密接に関わっていると思う。かつて多大な情熱をこめて左翼運動に参加し、左翼的な文学作品「腕」や「導火線」も発表したが、プロレタリア文学を代表する重要な人物中野重治には認められなかった。それが直接の原因になったかどうかわからないが、挫折した彼女は家出し、東京でデカダンスな一人暮らしを送りはじめた。そこで、プロレタリアの転向にもまた出合い、さすが検挙までされなかったが、一人の若い女性の内心の葛藤が相当に激しかったかは想像に難くない。「白日の書」は、横田文子がのちの「浪曼主義派」の人々との交わりのなかで、ついにそれまでの個人の不安と焦燥、絶望と憤懣を一人の女性の同性愛物語に託して描出し、殺伐とした時代や社会への反逆までに昇華したものであろう。この抒情豊かに描きだされた「白日の書」の「浪曼」は、一方において『満洲浪曼』創刊当初、文学の純粋さを主張しており、国策文学を唱える政府との距離を取って見せようとする主宰者北村謙次郎の文学主張に合致しているとも言えるし、他方で、新京のイデオロギーに対する北村の反逆の気持にも通じているのである。そのうえ、前述した幾つ

27 劉建輝「満洲浪曼の周辺」(『満洲浪曼』別巻「満洲浪曼」研究，東京：ゆまに書房，2003)，p.132.

かの現実的な理由もあったため、北村は我々現在の読者をも驚かせる、この八十七頁もある長い小説を『満洲浪曼』創刊号に再録したのであろう。しかし、第二輯における北村の「白日の書」に対する態度の変化から見てみると、「白日の書」における「浪曼」は北村謙次郎がのちに唱える「大きなロマン」或いは「満洲ロマン」との間に、実に大きなずれがあると言わなければならない。そして、再び『満洲浪曼』に作品を掲載されなかったことや、賛歌をよく歌っている時代に背いて「満洲」の「美しき挽歌」[28]即ち衰歌を歌っていることなどを考えてみれば、八年間も「満洲」で過ごしていた横田文子はそれなりに時代の流れに流されながらも、常に中心文壇と一定の距離をとって、彼女なりに時代への反逆姿勢を保つことができたのではないかと筆者は思うのである。

参考文献

東栄蔵(1993)『横田文子 人と作品』, 長野：信濃毎日新聞社.

北村謙次郎(1960)『北辺慕情記』, 東京：大学書房.

松葉志穂(2012)「近代日本における職業婦人同士の心中と同性愛――1920~30年代を中心に――」(『大阪大学日本学報』 第31号, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室).

尾崎秀雄(1991)『近代文学の傷痕』, 東京：岩波書店.

大森郁之助(1998)「要略・日本近代小説の《貝合せ》――その傾向、あるいは偏向――」(『札幌大学総合論叢』第5号).

呂元明・鈴木貞美・劉建輝編著(2003)『満洲浪曼別巻 「満洲浪曼」研究』, 東京：ゆまに書房.

呂元明・鈴木貞美・劉建輝監修(2003)『満洲浪曼 第一輯』, 東京：ゆまに書房.

呂元明・鈴木貞美・劉建輝監修(2003)『満洲浪曼 第二輯』, 東京：ゆまに書房.

呂元明・鈴木貞美・劉建輝監修(2003)『満洲浪曼 第五輯』, 東京：ゆまに書房.

菅 聡子(2006)「女性同士の絆―近代日本の女性同性愛―」(『国文』第106号, お茶の水女子大学国語国文学会).

保田與重郎(1939年)「跋」(横田文子『白日の書』, 東京：赤塚書房).

林濤 Tao LIN

(中国)北京師範大学外文学院日文系。副教授。中日比較文学、日本文学など。

「周作人と武者小路実篤」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第４号, 東京：開城出版社, 1998)、「中国における日本女性推理小説の翻訳と紹介」(『松本清張研究奨励研究報告』北九州市立松本清張記念館, 2006)、「日本当代女作家津島佑子」(『外国文学』第2号, 北京：外研社, 2000)、「迷失的女性――论夏树静子的『W的悲剧』」(『日语学习与研究』第1期, 北京：日语学习与研究杂志社, 2009)、「『追捕』与70年代末中国的接受视阈」(『日语学习与研究』第4期, 北京：日语学习与研究杂志社, 2010)。

28 「美しき挽歌」は、「風」「恋文」(二編ともに1938年に『満洲行政』に発表)「あるクリスマスの物語」(1940年に『満洲行政』に発表)の三つの短編で構成されている。1942年6月に創元社から刊行された『満洲各民族創作選集』に収録。いずれも「満洲」の白系ロシア人の町・寛城子を舞台にし、弱い立場の異民族の視点とヒューマリズムの立場から「満洲」で生活している人々の姿を描いている。